

# 比較芸術学科第1期生の卒業を迎えて

芸術を学ぶ喜びを堪能、  
学科の可能性を広げた1期生

4年前に新設された文学部比較芸術学科の第1期生が、今春卒業を迎えます。学業に真剣な姿勢で取り組むだけでなく、一致団結して様々な企画を打ち立て学科を盛り上げた学生たちの熱意と行動力は、先生方の想像をはるかに上回るものでした。比較芸術学科を率いてきた先生と1期生の学生に、この4年間を振り返っていただきました。



**那須** 第1期生を迎えたとき、「君たちは比較芸術学科に入ったんじゃない。君たちが比較芸術学科をつくるんだよ」と言ったことを覚えています。4年後の今、君たちは本当によくやってくれたと思う。熱心に勉強しただけでなく、自主的に様々な活動をしてくれました。まず学科を「ヒゲ(またはヒゲイ)」と呼び始め、ヒゲのロゴ入り豪華カラー刷り季刊誌『HIGE会報』を創刊して健筆を振るい、諸研究会を設立し、APC(青山パフォーミング・アーツ・クラブ)なるサークルを立ち上げ、ついにはヒゲ美女(笑)カレンダーまで作って見事に学科を盛り上げてくれた。すばらしい1期生でした。

**出光** そうした学科への愛は、普段の授業にも溢れていましたね。美術作品のスライドを見せるたびに、学生の目がキラキラするんです。その情熱に応えるため、私自身も夢中になって日々作品と向かい合って美しい写真入りのスライドを作るといふ、これまでにない貴重な体験をしました。最初は日本画のことを何も知らなかった学生たちが、ゼミ選択の際には自分の好きな作品や作家を熱く語れるようになっていたのは嬉しかったですね。

**稲葉** 自分の場合も授業で「本物を鑑賞

する」ことが大きな糧となり、成長につながったと思っています。また、芸術は一人で静かに鑑賞するというイメージが強かったのですが、1期生はみんな仲が良かったので、よく一緒に作品を見に行きました。相手の感想や意見を聞くことで自分の感性が広がるのも実感できたことは大きな収穫でした。

**岡林** そうですね。私もとにかく幸せな4年間でした。自分の好きなものについて話せる友達もいることが本当に幸せで、毎日が楽しくてたまりませんでした。もちろん個性豊かな先生方からも常に大いに刺激を受けました。東洋にも西洋にもすばらしい文化や芸術があることを学んでいるうちに、それらを受け止めるだけでなく発信したいという新たな思いも生まれ、今の就職につながった気がします。

**那須** 洋の東西を問わず、何百年も風雪に耐えた芸術の価値はやはり揺るぎない。そして美術、音楽、演劇はある時代精神のもとで複合的に絡み合っているものです。だからこそわが学科は「古典重視」「比較学習」「鑑賞教育」をキーワードにしているのです。3つ目のキーワードの実践として土曜日には毎週のように美術館見

学や演奏会鑑賞、観劇がありましたね。この3本柱に加え、芸術と不可分である宗教の基盤があり、総合大学として学際的に学ぶ環境が整っていることが本学で芸術を学ぶ強みといえるでしょう。

**出光** 本学科なら自分が恋に落ちるような作品に、4年の間に会えることができます。良いものだけを見ていけば、次第に悪いものが分かるようになっていき、これだという作品に出会えるのです。また、テキストを読む力も重視しました。作品の意味の奥深いところまで追究するには、感性を磨く努力とテキストを読む力の両輪が必要です。良いものを見る目を養うだけでなく、それをうまく表現できてこそ、この学科での学びが活かされるのです。

**那須** 芸術など専攻して就職はどうなるのかという不安を抱いた人もいるかもしれないけれど、他の学科と遜色ない結果になりました。何であれ有為の学生が真剣に勉強すれば、今の世の中、それは認められるということですね。さて、その勉強ですがお二人は、どんな授業や講演が特に印象に残っていますか？

**稲葉** 2年生の必修科目だった「芸術と法」です。特定の作品を取り上げてそれが

芸術的価値の高いものなのか、あるいは世間一般にありふれた世俗的なものなのか、法と照らし合わせていく内容でした。僕はもともと芸術について無知だったので、だからこそ学んでやろうと思いこの学科を選びました。何も知らなかった入学時の自分なら、対象の作品を単に世俗的にとらえたでしょう。しかし、1年間学んだことで、受講終了時には芸術的な観点からも考えられるようになっていました。この授業によって作品の価値を多角的な視点で考える力を、よりしっかりと身に付けることができました。

**岡林** 私の場合は、先日の桂歌丸師匠の特別講演会で、歌丸師匠が「俺は目をつむる瞬間まで舞台の上で語っていたい」と話されていたのが、胸にどーんと響きました。自分なりにいろいろなものを鑑賞してきましたが、実際に現場の最前線で活躍されている方は、私たちには到底理解できないほどのプレッシャーがあることでしょう。たくさんの重いものを背負いながら高座に座り、そう言い切った師匠の眼差しの強さは、その日は眠れなかったくらい強烈でした。

**那須** そういえば、先輩がいないという環

左から

稲葉 光治 さん 文学部 比較芸術学科4年  
福岡県立修猷館高等学校出身  
内定先：株式会社サガテレビ

岡林 ももこ さん 文学部 比較芸術学科4年  
高知県私立土佐塾高等学校出身  
内定先：松竹株式会社

出光 佐千子 准教授 文学部 比較芸術学科 (専門：日本美術史)

那須 輝彦 教授 文学部 比較芸術学科主任 (専門：音楽学〈西洋音楽史〉)

(以下敬称略)

境は、皆さん全く気にしている様子がありませんでした(笑)。

**稲葉** 僕の場合は「先輩がなくてラッキー」とまで思っていました(笑)。先輩がいる中で自分から発信するのは勇気がいることです。僕自身は大丈夫だったと思いますが、周囲の仲間が全員そうとは限りません。しかし先輩がいなかったからこそ「やってみようかな」と思うことや思う人が増えたと考えれば、むしろ恵まれていたのではないのでしょうか。

**岡林** 私も気になりませんでした。『HIGE会報』の初代編集長を務めさせていただきましたが、もしも先輩がいらっしゃったら、雑誌作りは先輩から聞いた話を踏襲して進めただけだったと思います。自分たちで一から作るのは大変でしたが、だからこそやりがいもあるし、可能性も広がりました。先生方も「やっごらん」と応援してくださいるばかりでしたので。

**稲葉** むしろ自分たちがやらないと、後輩が戸惑ってしまうこともあるかもしれない、そんな思いもありました。やはり1期生の「自由」には「責任」も伴っていたと思います。

**那須** 卒業後はこの学科で学んだことをどう生かしたいですか？

**稲葉** 地方にも芸術を浸透させ、それによってその地域の魅力を増やしていきたいと考えています。学科で学ぶうちに芸術が東京ばかりに集中していることに強く疑問を抱くようになりました。これからは就職先の地元九州のテレビ局から芸術を発信していきたいです。

**岡林** 物質的に豊かなのに悲しいニュースが多い今だからこそ、私は「ヒゲ」で学んだことを生かして松竹株式会社で、誰かの心が温まったり、思い出の一部になれ

たりするようすばらしい作品に関わっていければと思っています。

**出光** 1期生卒業のときは泣いてしまいましたが(笑)。皆さんは、私自身も幸せにしてくれる学生たちでした。これから旅立っていく姿を見送ることができるのが嬉しいですし、卒業後こそ社会での活躍をずっと応援したいです。

**那須** 本学には大学院文学研究科比較芸術学専攻がありますが、これからは、本学科から進学する学生も出るわけです。美術・音楽・映像演劇という3分野においての本格的な研究者が育っていくことも大いに期待しています。最後にもう一度、1期生にはとにかく感謝です。



## 桂歌丸師匠特別講演会を開催

2015年11月5日(木)、青山キャンパス本多記念国際会議場にて、落語家の桂歌丸師匠をお招きして特別講演会を開催しました。まずお弟子さんの桂歌助師匠が前座として『都々逸親子』を演じると、学生たちの緊張した空気が大きな笑いと共にほぐれました。続いて高座に上がった歌丸師匠は、ご自身の体調について笑いで包んでお話しされたあと、「つる」を口演され、その絶妙な話芸に会場は一層大きな笑いに満ち、圧倒されました。その後のお話で、芸を磨くために歌舞伎を観ることや、明治の落語家三遊亭円朝の創作落語を埋もれさせず継承していく意志と工夫についてなどを歌丸師匠から伺ったことは、大きな学びとなりました。最後に「なぜ長く落語を続けてこられたか」という学生の質問に対する「好きだから。好き以外にない」との歌丸師匠のお答えは、学生たちの胸に深く響きました。芸術を学ぶ原動力を再確認し、これからの学生生活や進路に対する前向きな力を与えてくださるものとなりました。(文学部 比較芸術学科准教授 佐藤 かつら 記)